

健康文化

## 入り日

今井田 二三子

若芽の萌え始めた煙るような木の枝越しに、おぼろにかすみながら山の端に沈む太陽、燃えるような夏の一日が終わり、折りからたち始めた涼風に送られながら青田の向こうに沈む太陽、すすきの穂を金色に輝かせ、やがて茜色に染めながら沈む秋の入り日、くろぐろと凍てついた田の彼方の山に、そこだけ最後の温もりを残しながら沈む冬の入り日、輝く光の矢が次第に細り、空を茜色に染め雲の端を金色に輝かせ、やがて紫色に、そして薄墨色に空の色を刻々に変えながら少しずつ隠れゆく入り日、その荘厳な時には風も音を潜め、小島も囀りを止め木も草も静かに見送るかのように感じられ、静寂の中に我を忘れて立ち尽くしていることがあります。

幼い頃、近所に同じ年頃の遊び友達のなかった私は家の西にありました堤の上で草花を摘んだり、蜻蛉を追いかけて独りで遊んでいることがあり、夕焼けを合図に家に帰らなければならないため時々太陽が沈むまで眺めていることがあったように思います。小学生の時、また女学生のときの夏休みの図画の宿題に入り日の風景を描いて提出したのを覚えております。小学生の頃は入り日の後に始まる一家団欒の夕食の時間が嬉しく、そのため入り日が好きであったのかも知れません。女学生の時は入り日にロマンを感じて描いたように思います。その絵はあまり上手でなかったのでしょうか何の評もなく返えされたときには、思いをこめて描いただけにがっかりしたのを思い出します。

私の一生も入り日に近づいてきた今、その頃と異なった思いで入り日を眺めている自分を感じます。

以前に時々往診に訪れておりました老農夫の方がありました。たいした苦痛の訴えもなく、ただ黙々と横になっておられたその方は最後の時も何時息をひきとられたか判らないくらい静かでした。臨終を告げますと何時も側で見守っていらっしやった老夫人は静かに曲がった腰をあげられました。何が入用かを察しられた息子さんが仏壇からお鈴(りん)を取って手渡されますと御主人の耳許でそれを鳴らされました。その手許に振えはなく、澄んだ音色が長く尾をひいて消えてゆく中で家族の方々が「おじいちゃん、おじいちゃん」と呼びかけ

られても、もう思い残すことはないかのように再び目を開かれることはありませんでした。

おぼろにかすむ春の入り日を眺めますとき、静かで穏やかであったその老農夫の方の最後の光景を思い出すことがあります。

また病のお子さまのため、御自身も病弱でありながら定年後も勤めを続けておられた恩師のことを思い出すことがあります。

お亡くなりになる少し前の雪の日に往診に伺いますと「帰る途中、家の近くで雪に滑って倒れたが、どうしても起き上がることができず、人を呼ぶにも声が出なかったよ」と言われたことがありました。それからどうして家に帰りつかれたかは語られませんでしたが、それほどまでにして勤めにでられなくてもと思う私の心を感じとられて何か言われましたが、言葉をはっきり聞き取ることができませんでした。清廉で高邁な先生に私は何をしてさしあげたらよいのかと自分の非力を悔やみ情けなく思いました。暫くしてから昼間の往診で重篤な容態を感じたが私が夜の診療を終えて再び伺ったときには先生の声はもう言葉にはなりませんでしたが。振り向いた私の目の色を見て奥様が先生の耳許で「あとのことは心配なさらなくてください」と大声で告げられますと先生が目尻から涙が一条流れ落ち、その涙が枕に届かない先に息をひきとられました。凍てついた道の彼方の山の端に沈む入り日を眺めますとき、そのときの胸のつまるような情景が心に浮かんでいきます。

人の最期にも、それぞれ春夏秋冬の入り日の荘厳さと、その後におとずれる静寂の時があるように思えます。さて私の最後の時はと思えますと、もとより荘厳にはならないことは自覚しておりますが、せめて静かでありたいと願う思いは今も変わっていないように感じます。

(内科開業医)